



進学準備と縁の下で  
ささえてくれた母を思う。



koberyol

昭和のはじめの時代である。

当時、非常に珍しかった塾に私は通うことになった。

T先生がやっておられた塾である。

私は小学生の子どもであった。同学年は私ともう一人、Sさんという女の子である。Sさんのお父さんはお巡りさんで、とても教育熱心なご家庭であった。

塾のT先生は、中学受験対策として過去出題された問題集を使用されており、二人は常時、それを反復学習させられたものだった。

ともかく「算数」にしても「国語」にしてもSさんの方がよくできた。

算数は鶴亀算とか植木算とかを出題され、ふたりは常に競争させられた。子ども心にライバル意識が強く、ふたりとも反抗して仲良くなれなかった。

T先生は、私には中学の進学を考えてくれて、進学をめざす学校として、まずは安田財閥が運営している「安田商業」とか、そのほかの学校としては「日本中学」、あと「正則中学」、「京都商業」、そして「早稲田実業」などの各校の入学案内を取り寄せてくれた。

小学校での私の担任だったK先生と父との相談の結果、「早稲田実業学校」を受験することになった。

昭和十五年に小学校卒業という当時の社会状況は、日増しに戦時色が濃くなっていった頃である。

たとえば、商品の名前がハイカラな外国語だった場合は、敵性語であるという理由から、それを日本語の名前に変更されるということが急速に進んで行った時代である。具体的には、タバコの「ゴールデンバット」が「金鷄（きんし）」と変えられ、「チェリー」という銘柄が「桜」とその表示が変えられた。横文字はすべて日本語に変えられて一掃され、戦争の態勢がすすんでいった。

当時、進学する者は、受験の合格を祈願するために「明治神宮」に参拝した。

また、町内には氷川神社があったので、前を通るたびに手を合わせて、「よろしくおねがいます」と心を込め、つぶやいた。

本町小学校の六年の二組からは洋品店屋のS君、駐在所にすんでいたK君、ハトを飼育していたS君、三組からは氷川神社の横にすんでいたK君が受験した。

当時の「早実」は、早稲田大学の直系校で、大学創設者の大隈重信侯の娘婿、浅川校長の指導のもと、六年生の学校であった。一部専門学校の内容も備え、高度な教育内容であった。

合格発表の日は、母が付き添いで早稲田まできてくれた。おかげさまで合格していたので、大喜

びをしたものだ。

合格のお祝いということで、何か普段、食べることができなようなご馳走を母がしてくれるという。そこで新宿は、京王電車の本社ビルにあるレストラン、京王食堂に行った。

京王食堂のウィンドウケースを眺めていて、その頃はハイカラな食べ物であり、おいそれとは口にできないカツ丼が眼に止まったのである。

食べたいので母に、「カツ丼」といった。

すると母は、「カツ丼」と表示してある札をみて、「あれはカツドンではなく、カツイだよ」という。

つまり、「丼」と「井」の字が似ており、「井」のなかに「、」があるだけで、なぜ「どんぶり」となるのか、わからない、と逆に私に質問してきたのである。

そうして「井」のなかにテンを一つ入れるだけで、「どんぶり」となるのが理解できないと、どうしても譲らないのである。

結局、カツ丼を食べ、京王レストランを出たものの、しかし、合格したあとの「カツ丼」の味覚はお祝いのそれではなく、なんとも後味の悪い合格祝いとなった。

私はこの日のことを思い出すと、母は時代遅れの田舎の人であったかと、いまも憐憫の情を感じる。合格で父のよろこびようは大変なもので、これから期待に応えられるよう頑張る、と誓ったのであった。

憧れの中学生になり、早稲田実業学校に入学する昭和十五年四月一日、午前八時からの入学式には約二百名の新一年生が集合した。

嬉しさのあまり、これから何ごとにも物怖じせずやってやるぞ、といった具合に、チャレンジ精神が前面にみなぎってきて、力があふれでるように思えてならなかった。

見るもの聞くものすべてもの珍しく思ったりしたのであるが、軍靴の響きもまた、間近に迫ってきた時代ではあった。